

第7回 御南学区三世交流グラウンドゴルフ大会

学区体育協会の主催、岡山白石郵便局の後援により、好天に恵まれた6月4日(日)御南小学校で開催されました。チームは三世代男女6名の混成、5町内会・各3チーム(郵便局1チーム)、合計16チームの約100名が参加し、和気あいあいのうちにも熱戦を繰り広げました。田中野田は昨年と同様好成績で、団体で2位が1チーム、個人では50歳以上で1位と2位、小学生が3位、ホールインワンも3名ありました。この大会に参加した小学生(6年生)が、下記の感想文を寄せてくれました。

はじめてのグラウンドゴルフ

(4組) 脇坂 ちひろ

6月4日の午後、御南小学校の運動場で町内ごとにわかれて、グラウンドゴルフをやりました。私のチームは6人で、お母さんといっしょに回るようになりました。私は御南小学校でやるグラウンドゴルフは、初めてです。試合が始まるまで、お母さんや同じチームの友達と、私とで練習をしました。グラウンドゴルフは、ゴールまでのきりが全部ちがうので、打つときの力の入れかたがむずかしいです。力を入れすぎると、だいぶ遠くまで飛んでしまうので、きりをよくみて、力の入れぐあいを考えないといけないので、とても大変でした。

いよいよ試合が始まりました。8ホールまであって、AコースとBコースの2つのコースを回りました。私は2打で入れたのが最高でした。お母さんとおばあさんが、ホールインワンを入れました。私もホールインワンをねらいましたが、だめでした。試合が終わりやすんでいると、友達のおじちゃんが「小学生の部で、ちいちゃん3位だよ」と教えてくれました。

ついに結果の発表です。チームでは、私たちの田中野田Bチームが準優勝でした。小学生個人の部でドキドキしていると、私の名前が言われたのでとてもうれしかったです。この大会にでて、いろんな人とプレーできて、とてもおもしろかったです。また、グラウンドゴルフを、たくさんの人とやりたいなあと思いました。

夏まつりのお知らせ

第17回夏まつりは8月5日(土)一軒家の観音堂06日(日)に決まりました。これの準備と設営作業は7月30日(日)、後片付けは8月6日(日)に行いますので、多くの方々のご協力をお願いします。

夏まつりは、町内住民の融和と親睦を図る大きな行事です。町民みんなで参加し、盛大なまつりとなるよう期待しております。

虫のはなし(3)

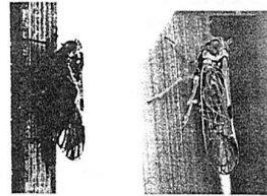
ウンカ物語

—海外から飛来する小さな虫たち—

平尾重太郎

いま梅雨たけなわである。平年で梅雨明けは7月20日前後、これから本格的な梅雨で雨が多くなる。梅雨期になると毎年のように思い出されるのが、海外から渡って来る小さな虫たち、ウンカのことである。ウンカは農家の方なら誰でも知っているイネの大害虫で、正確にはセジロウンカとトビイロウンカの2種で、かつて私の仕事相手でもあった。

ウンカを漢字で書くと浮塵子、これはチリ(塵)のように小さく、チリのように数が多いことを表わしている。成虫の大きさは4mm程度(写真一組は約1mm)、短時間に猛烈に殖え、イネ株に群がって吸汁し、間もなくイネを枯らしてしまう。



トビイロウンカ セジロウンカ

江戸時代や明治時代の大飢饉は、西日本ではこのウンカが大発生して、凶作になったことが原因とされている。このように古くからの大害虫であるにもかかわらず、日本国内のどこで、どんな状態で越冬するのか、全く不明のままであった。毎年南方から飛来してくる、いや国内のどこかで越冬しているとする説、しかしどの説にも確証はなかった。この問題を解明するため、当時の農林省は全国10道府県の農業試験場の参加のもとに、昭和26年から10年間も越冬調査を行ったが、結果は依然として不明のまま残されていた。

ところがそれが終って数年後、たまたま2つの大きな出来事が相次いで起った。その一つは、昭和41年7月8日鹿児島県南部のあちこちで、調査用の野外灯火(60W電球)に、1夜で1灯当たり実に200万~300万匹のウンカが捕捉された。そして次は、翌42年7月潮岬の南方500mの太平洋上で、気象庁の気象観測船が空中を飛行している、微小な昆虫の大群に遭遇した。帰国後昆虫専門家に診てもらったところ、なんとこれが話題のウンカであった。ちなみに、両年とも7月以降日本(関東以西)や韓国では、近來希なウンカの大発生が起った。以上の二大事件から、

本紙特別号の刊行について

ふれあい新聞の特別号として「写真でみる郷土田中野田の変貌」—仮題—を8月に刊行する予定です。A4版数頁の小冊子ですが、区画整理前後の町内の変貌状態を記録したものです。区画整理前町内の風景・スナップ写真等(モノクロカラー)をお借りしたく、多少にかかわらずこれらを持ちの方は、町内会長へ連絡してください。

これまで不明だったウンカの発生源について議論が再燃した。

そこで、農水省ではウンカの採集調査を昭和43年から始めた。東シナ海で毎年梅雨期に運航される気象庁の気象観測船に、昆虫専門家が1人便乗させてもらい、3週間の航海中船のマストに径1cmの網を3個吊し(海上約10km)、網に入ってくるウンカを3時間ごとに採集し、あわせてその時の気象データを記録した。私も48年と49年の2回乗船し、360度全く陸地の見えない東シナ海の中央部で、天候次第であるが両年とも多数のウンカを採集することができた。

これら一連の洋上調査や日本本土での調査研究により、ウンカは日本国内では越冬できず、毎年梅雨期に中国大陸南東部から海を渡って飛来することがわかった。中国大陸南東部で繁殖したウンカは、上昇気流により1500~2000m付近に持ち上げられ、その高度で吹いている強い南西風(下層ジェット気流という)に乗って、東シナ海を横断して日本や韓国へ飛来する。飛来期間は下層ジェット気流(時速30~40%)が発生する梅雨の時期で、およその飛来所要時間は10~20時間と推定されている。そして、飛来するのは成虫になってから1、2日目の未交尾の状態のもので、メスでは卵巣がまだ十分発育していない身軽な個体である。

現在では、コンピュータを操作して、天気図から下層ジェット気流の存在を読みとり、実際の飛来の1日前までに、日本のどの辺にいつ飛来するかが予測できるようになった。実際、各県でこの方法で予測が行われて、飛来情報が流され、その後の防除活動に役立てられている。しかし、飛来量の予測はできないので、飛来日に水田で調べることとなる。なお、飛来がありそうな日は天気図でもだいたいわかる。すなわち、梅雨前線が中国大陸南部から日本本土へ伸びて停滞し、その上を次々と低気圧が東進するような模様するときである。梅雨期にはテレビや新聞で気をつけて天気図を見てください。

飛来量は飛来源(中国大陸)に近いほど多く、いつでも多いのが東シナ海に面した長崎県と鹿児島県で、九州でも東部の大分県では少ない。そして本州での飛来は静岡・長野・富山県までであるが、セジロウンカのほうは日本海沿岸側を北海道まで達する。飛来後水田に定着したウンカはイネで2~3世代過ごし、越冬できないので秋には死滅する。なお、これらウンカは熱帯性で、アジアでは広く年間常時発生している。

ところで、中国では昭和50年代に、日本と同様にウンカの越冬や飛来の問題が全国的組織で研究された。その結果、大陸の大部分の地域では越冬できず、早春にインドシナ半島から大陸南東部へ飛来して、そこの水田で繁殖し、次いで逐次北へ飛来移動して繁殖、このような経過で5波にわたり、7月中旬~8月上旬には山東半島付近へ到達するという。中国での繁殖場所と移動時期から考えて、中国の第3波と第4波の一部が北東へ向かい、日本や韓国へ海を渡って飛来侵入することになる。